



Title	ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーをめぐる新事実
Author(s)	生田, 美智子
Citation	大阪外国語大学論集. 2000, 23, p. 67-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79831
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーをめぐる新事実

生 田 美智子

Новые материалы относительно Н. А. Невского

Митико ИКУТА

Настоящая статья посвящена итогам работы в архивах Санкт-Петербурга и у дочери покойного Невского Елены Невской. Здесь были обнаружены прежде не опубликованные сведения о Н.А. Невском автобиографического характера (о составе семьи, ближайших родственниках по отцовской и материнской линии и др.).

Кроме того в статье приводятся и материалы об обстоятельствах гибели Н.А.Невского в 1937 г.

はじめに

このたび、2000年2月24日から3月2日までペテルブルグに出張した。大阪外国語学校（大阪外国語大学の前身）の初代ロシア語教師ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー関連資料の収集のためである。

ネフスキーの伝記に関しては周知のように、日本では1976年に加藤九祚氏が『天の蛇』（第三回大佛次郎賞受賞）⁽¹⁾ を書き、ロシアでは1978年にグロムコフスカヤとクイチャーノフが共著で『ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー』⁽²⁾ を書いている。しかし、情報統制下にあった当時の状況ではいたしかたのないことではあるが、歪んだ事実が伝えられていたことを指摘せざるをえない。

ネフスキーの生涯は、生活空間から見た場合、レイビンスク時代、ペテルブルグ時代、東京時代、小樽時代、大阪時代、レニングラード（1924年1月から1991年8月までのペテルブルグの名称）時代に大きく分けることができる。45歳で突如かれの生涯はスターリン時代の粛清の犠牲となってとだえる。短い生涯の15年間を日本ですごし、その7年間（1922—29年）を大阪外国語学校で教鞭をとって暮らした。

ベレストロイカ、特にソ連崩壊以降、古文書が自由に閲覧できるようになり、次々と新しい事実が発見され、歴史が書きかえられている。ネフスキーは大阪外国語学校のロシア語科で7年間も教鞭をとった世界的学者であり、彼の伝記的事実を新しい研究成果を採り入れ、

書き直すことは重要である。

今回の調査ではネフスキーの遺児エレナ・ネフスカヤ（愛称ネリ）にインタビューを行い、同家が所蔵する未公開文書を書き写すのを許していただいた。また、ペテルブルグのいくつかの古文書館や古文書部でネフスキー関連の資料を閲覧することができた。

本稿では、紙数の関係で、さしあたり次の二点を明らかにしておきたい。第一に、彼の親族関係をめぐる情報、第二は、ネフスキーの死にまつわる事実である。

これをもって、日露交流史におけるネフスキーの位置づけを明らかにするための第一歩としたい。

1 親類をめぐる既知情報

彼の出自については彼自身は次のように言っている。

「私はヤロスラヴリで1892年に生まれた。両親は商人の出であった。生後一年もたないうちに母親が死んでしまった。父親はまもなく再婚し、後妻との間に二人の娘が生まれた。その頃父は小さな地方都市ポシェホニエでヤロスラヴリ地区裁判所の予審判事として働いていた。1896年父が亡くなったが、私に何らの遺産を残すことはなかった。私は亡母の両親にひきとられ、彼らのいるルイビンスクへ移り、妹たちは義母とともにヤロスラヴリに住む義母の両親のもとへ戻った。1900年にルイビンスクの古典ギムナジウムに入学し、1909年に銀メダルで卒業した。ギムナジウム在学中に祖父母がなくなり、私の養育と教育は母の姉にゆだねられた。伯母には十分な資産がなかったので、私はギムナジウム4年生から伯母の家計を助けるべく学費を自分で稼がなければならなかった。低学年の生徒の勉強をみたり、家庭教師をして収入を得た。私は全課程学費を免除された。ギムナジウムを卒業すると、ペテルブルグ工科大学に入学したが、二回生になると、鉄道の機関士の助手としての実習をすてて、ペテルブルグ大学の東洋語学部に移った。専門として選んだのは、昔からあこがれていた中国語と日本語だった」。(3)

ロシアの西夏学者クイチャーノフが1963年にルイビンスクでネフスキー関連の戸籍を調査するまではこれ以上のことは知られていなかった。

クイチャーノフは、二人の異母妹がエレナとキラであることを明らかにし、ネフスキーと一緒に育った従姉妹のマリヤ・ドミトリエヴナ・セロヴァの回想を聞き出した。さらに、母方の祖父ニコライ・アンドレエヴィチ・ソスニンが司祭であったことを紹介しただけではない。1892年のヤロスラヴリ市のスパソナゴロツカヤ教会にあるネフスキー生誕の記録を伝えている。

双方とも正教徒である十等官アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーとその正妻エレナ・ニコラエヴナの間には1892年2月18日に息子のニコライが生まれ、2月23日に洗礼を受けた。洗礼親は県書記アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーとルイビンスキー寺院の長司祭の妻オリガ・ヴァシリエヴナ・ソスニナである。(4)

さらに、レイビンスクにネフスキーの従姉妹のエカテリーナ・ヴァシリエヴナ・アレフィエヴァとナタリヤ・ヴァシリエヴナ・ソスニナがすんでいるが、彼らはネフスキーの少年時代をあまり覚えていないことも明らかにした。

それから現在にいたるまで27年程が経過したのに、それ以上の情報はつけ加えられることがなかった。

この度の調査でエレナ・ネフスカヤの所有する文書の中にヤロスラヴリの戸籍課からの情報 (1998年1月4日付) をみつけることができた。それらをもとに父方と母方の親族をあきらかにしておきたい。

2 父方の親戚

ネフスキーの父方の祖父アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーと祖母のエリザヴェータ・ペトロヴナはヤロスラヴリ市のヴォズドヴィジェンスカヤ通5号棟に住んでいた。

祖父はヤロスラヴリにあるスパソナゴロツカヤ教会の教区信徒であった。いつ祖父と祖母が結婚したか、現在も特定できないが、この教会の1855年からの戸籍簿には家族の異動が次のように記録されている。

1855年6月21日にヤロスラヴリ市の市会の書記である祖父とその正妻である祖母の間に(二人とも正教徒) 長男ウラジーミルが生まれたが、1855年9月1日に夭折している。

次に戸籍簿に書いてあるのは、ニコライのことである。当時ヤロスラヴリ市会の14等官である祖父と祖母の間に息子のニコライが1856年10月6日に誕生したが、1857年1月29日死亡している。

このような不幸のなかでも祖父はトントン拍子に出世し、1858年には県書記になっている。祖父母の間にはさらに子供が生まれた。

1858年10月11日には娘のエリザヴェータが生まれたが、1860年10月7日に夭折している。1861年7月18日に息子のドミトリイが生まれ、1863年10月23日に息子のアレクサンドル(われらがネフスキーの未来の父親) が生まれている。1866年7月9日には息子のミハイルが生まれ、1870年6月26日には娘のマリアが生まれている。⁽⁵⁾

祖父は1899年9月19日に65歳で水腫が原因で死亡している。スパソナゴロツカヤ教会で葬儀が営まれ、ヤロスラヴリのレオンチエフスコエ墓地に埋葬された。⁽⁶⁾ 祖母が何時死んだかの記録はまだ見つかっていない。

ネフスキーの父親アレクサンドルに関する記録はきわめて少ない。80年代末にアレクサンドルはヤロスラヴリ市のデミドフスキー法律リツェイで学んでいる。1891年、アレクサンドルはレイビンスク市のスパソ・プレオブラジェンスキー寺院の長司祭の娘、エレナ・ニコラエヴナ・ソスニナ(ネフスキーの母親) と結婚した。レイビンスク市のスパソ・プレオブラジェンスキー寺院の書類には結婚の記録が残っている。

1891年6月5日花婿、ヤロスラヴリ管区裁判所の判事見習い、十等官アレクサンドル・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキー、27歳、初婚。

花嫁はルイピンスキー寺院の司祭ニコライ・ソスニンの娘エレナ・ニコラエヴナ、26歳、初婚。⁽⁷⁾

スパソナゴロツカヤ教会の戸籍簿によれば、90年代の初めにネフスキーの父母はヤロスラヴリに住んでいたらしい。

1892年われらがネフスキーが生まれている。洗礼親は県書記アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーとルイピンスキー大聖堂長司祭の妻オリガ・ヴァシリエヴナ・ソスニナというから、洗礼父は父方の祖父で洗礼母は母方の祖母であったことが分かる。

翌1893年の教会戸籍簿の「死者の部」に次のような記載がある。

1893年1月9日十等官アレクサンドル・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキーの妻エレナ・ニコラエヴナ、23歳は、風邪のために死亡。市のレオンチエフスコエ墓地に埋葬される。⁽⁸⁾

司祭はこの記録を作製する際に歳をまちがえたようである。エレナ・ニコラエヴナ・ネフスカヤは1865年5月20日に誕生しており、彼女は1893年には28歳であった。

同年、ネフスキーの父は母が死んで一年もたたないのに、早くも再婚している。1893年10月31日、スパソナゴロツカヤ教会での結婚のことが書かれている。

花婿は裁判官上級候補生、九等文官アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー、30歳、再婚。

花嫁はヤロスラヴリの商人故フョードル・ドミトリエヴィチ・ボチャロフの娘ライダ・フョードロヴナ・ボチャロワ、26歳、初婚。

花婿の保証人は八等官ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーと七等文官、神学校教師アンドレイ・イワノヴィチ・ベネジクトフ。花嫁方はヤロスラヴリの商人の息子ドミトリイ・ヴァシリエヴィチ・ドゥナエフとヤロスラヴリの町人セルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ドゥナエフであった。⁽⁹⁾

1894年8月8日ネフスキーの父親と義母の間に娘のエレーナ（ネフスキーの異母妹）が誕生した。洗礼親はヤロスラヴリの町人アルダリオン・フョードロヴィチ・ボチャロフと七等官ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー（ネフスキーの叔父）の妻のニーナ・コンスタンチノヴナである。

残念ながらネフスキー夫妻に関する他の情報は現在見つかっていないが、今一人の妹キラが生まれているはずである。

アルヒーフにはネフスキーの伯父ドミトリイ・アレクサンドロヴィチのピオグラフィが残っている。

すなわち、ヤロスラヴリのスパソナゴロッカヤ教会の1886年の戸籍簿にある8月31日の結婚証書である。

花婿—デミドフスキー法律リツェイの司書、10等官ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー、25歳、初婚。

花嫁—七等文官の娘ニーナ・コンスタンチーノヴナ・ゴロフシコヴァ、21歳、初婚。

花婿の保証人には、当時デミドフスキー・リツェイの学生だった弟のアレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー（ネフスキーの父親—生田）⁽¹⁰⁾ になった。

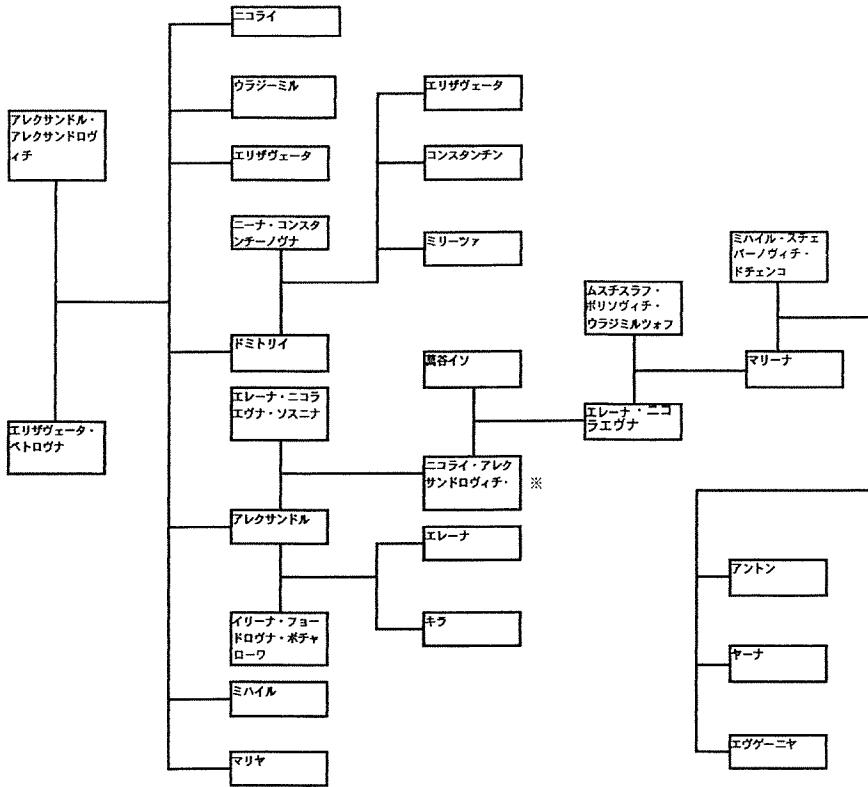
花嫁の父コンスタンチン・ドミトリエヴィチ・ゴロフシコフはヤロスラヴリでは著名人である。彼はデミドフスキー法律リツェイに勤務するヤロスラヴリ市議会議員であった。郷土歴史家でジャーナリストでもあるゴロフシコフはヤロスラヴリの郷土史に関する多くの作品を書いた。それらは『ヤロスラヴリ県通報』、『ヤロスラヴリ地方自治体通報』やその他の本に掲載されている。『ヤロスラヴリ市史』(1889年)は現代でもその価値を失っていないという。

のちに、ゴロフシコフはドミトリイ・アレクサンドロヴィチとニーナ・コンスタンチーノヴナ夫妻の子供たちの洗礼親になっている。

ヤロスラヴリ市における全ロシア国勢調査の時（1897年）にはドミトリイ・ネフスキー家はヤロスラヴリ市のイリインスカヤ広場に住んでいた（おそらくは、リツェイ所有の建物の中）。家族に関して次の記録が残っている。

- 1 ネフスキー・ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ、35歳。一代貴族。ヤロスラヴリに生まれる。デミドフスキー法律リツェイで学ぶ。本職はリツェイの司書、副業はモスクワ国際銀行の会計補佐。
- 2 ネフスカヤ・ニーナ・コンスタンチーノヴナ、妻、31歳。当地で生まれる。ギムナジウムで学ぶ。専業主婦。
- 3 ネフスカヤ・エリザヴェータ・ドミトリエヴナ、娘、9歳。世襲名誉市民、当地で生まれる。家庭で教育をうけている。両親と同居。
- 4 ネフスキー・コンスタンチン・ドミトリエヴィチ、息子、6歳、世襲名誉市民、当地で生まれる。両親と同居。
- 5 ネフスカヤ・ミリツァ・ドミトリエヴナ、娘、1歳、当地で生まれる。両親と同居。⁽¹¹⁾

以上を、分かった範囲でネフスキー家の家系図を示しておこう。



※なお、ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーは婚姻外で日本人女性前山光子との間に若子をもうけたが、若子はわかかくしてなくなった。

3 母方の親戚

母方に関しては、祖父ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ソスニンは司祭の息子で、自身も司祭であることはすでに分かっていた。クイチャーノフはニコライというネフスキーの名前はこの母方の祖父からとったのかも知れないと推測している。⁽¹²⁾

エレーナ・ネフスカヤ所有の文書によれば、さらに次のことが判明した。

祖父は1846年にヤロスラヴリの神学校を卒業後、ウグリチスコエ市神学校の教師になり、1848年に同校の生徒監、1850年にはヤロスラヴリのニコルブレンスカヤ教会の司祭になっている。1855年にヤロスラフスコエ神学校の教師になり、1858年にはルイピンスキー大聖堂に配属されている。勤勉な勤務ぶりにより金襴の腰あてと黒いピロード修道帽を授与されている。1865年から1872年まではルイピンスクの第三教区学校の神学教師であった。

15年間の勤勉に対し司祭は紫の修道帽を授与されている。さらに、三等聖アンナ勲章と二等聖アンナ勲章も授与されている（1883年と1887年）。

1888年に、30年間に及ぶ司祭としての勤務に対し教区の信徒たちから黄金の十字架を贈ら

れている。1892年段階で彼と妻のオリガ・ヴァシリエヴナ (60歳) の間にはヴァルヴァーラ (41歳、既婚)、ヴァシリイ (39歳、自治会医)、ドミトリイ (31歳、自営業)、エレーナ (27歳、既婚) という子供たちがいた。⁽¹³⁾

エレーナがネフスキーの母である。母の姉ヴァルヴァーラこそ、祖父母なきあとネフスキーをひきとって育てた人である。ネフスキーは、恩を忘れず、帰国後彼女の生活費の面倒をみた。エレーナ・ネフスカヤもその手記「両親について」の中で、ネフスキーが妻子と共によく訪れたのはこの伯母が身を寄せるアフロシモフ家であったことを伝えている。この伯母の期待にそうべく、ネフスキーはペテルブルグ工科大学に入学するも、懂れていた中国語と日本語をあきらめきれず、2年生の時にペテルブルグ大学の東洋語学部中国・日本語科に転校したのだった。

また、母を亡くしたマリヤやセリョジャやコーリヤ (伯父ドミトリイの子供たち) も、祖父母なき後はヴァルヴァーラ伯母にひきとられたのであった。

1897年段階ではソスニン家はルイビンスクのクレストヴァヤ通りのスパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂の教会職員の家 (6号棟) に住んでいた。当時の家族構成は次の通りである。

- 1 ソスニン・ニコライ・アレクサンドロヴィチ、戸籍主、71歳、聖職者、ヤロスラヴリ県のモロクスキー郡の生まれ。神学校で学ぶ。主要な仕事はルイビンスキー大聖堂の長司祭。女子中学の教師の仕事に対し年金を得ている。
- 2 ソスニナ・オリガ・ヴァシリエヴナ、妻、64歳、聖職者の娘、ヤロスラヴリで生まれ、家庭で教育をうける。
- 3 ロジナ・フェオクチスタ・アレクサンドロヴナ、またいとこの娘、66歳。未婚。官吏の娘。ヤロスラヴリ県のダニロヴォ市に生まれる。教育をうけず。叔父の家 (すなわち、ソスニン) の居候。
- 4 ソスニン・ニコライ・ヴァシリエヴィチ、孫、14歳。一代市民。クロンシュタット市で生まれる。教育をうけず。祖父の被扶養者。⁽¹⁴⁾

祖父のニコライ司祭には、これ以外にネフスキーはじめ多くの被扶養者がいた。すなわち、祖父は両親もしくは片親を失った多くの孫 (エレーナ、ドミトリイ、ヴァシリイの子供たち) をひきとって育てていた。

1902年の段階では家族は次のようになっている。

長司祭ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ソスニン。76歳、やもめ。病気のために退職。48年間勤務、そのうち司祭の位にあったのは42年で、長司祭の位にあったのは6年。二等の聖アンナ勲章と四等の聖ウラジーミル勲章を持っている。

息子のドミトリイ、42歳が同居。⁽¹⁵⁾

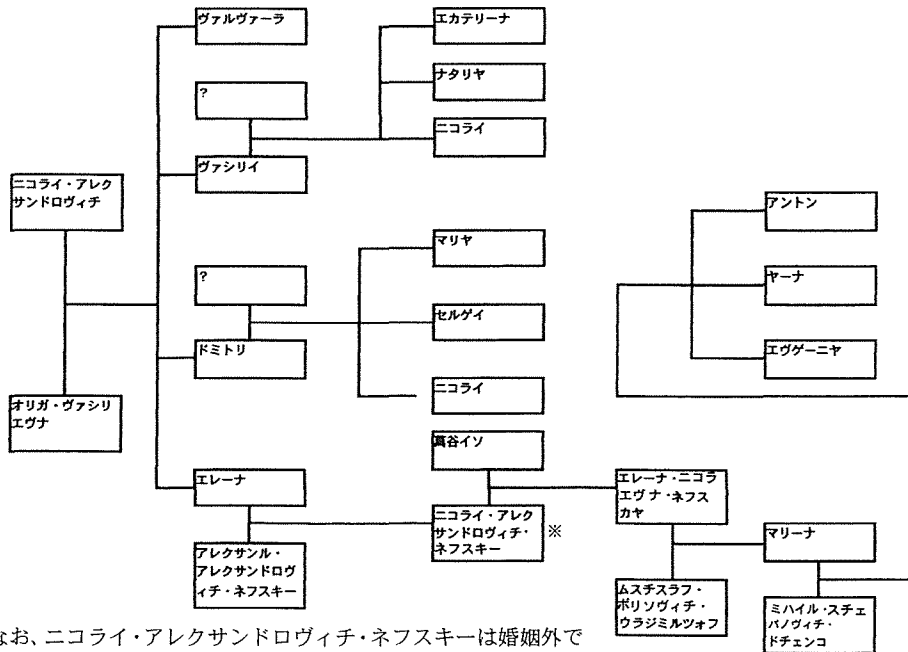
多くの居候を抱える祖父や伯母。ネフスキーは家計の負担を軽減すべく、家庭教師に出か

けていった。いく先々でネフスキーはチャストウシカ（普通4行からなる叙情的または時局風刺的な民衆歌謡）を集め、あわせて150曲ほど記録したという。後年精力的に展開することになるフィールド・ワークの原型は、このころに胚胎されたものといえる。

ネフスキーが子供時代に、大きな交わりをもったのは母方のソスニン一族であった。ネフスキーの最初の活字になった処女論文は「農業に関する血液の土俗」（『土俗と伝説』、1918年）というのが定説である。それを裏づけるかのように、ネフスキー自身が作成した業績目録にも最初に印刷された業績として、あがっているのは「農業に関する血液の土俗」である。

しかし、ここにニコライ・ソスニンによる談話を中山太郎が文章化した「冠辞異考」（『太陽』第24巻第2号）という興味ぶかい一文がある。松山慎一がロシア・ソヴェート文学研究会における口頭報告で指摘したように（1999年12月11日）、このニコライ・ソスニンがネフスキーその人である可能性が高い。ネフスキー自身が業績リストには含めていない論考ではあるが、処女原稿に祖父ニコライ・ソスニンの名前を用いていることに注目しておきたい。

以前からの情報に今回の調査結果を加味して、ソスニン家の家系図を示しておこう。ただし、ヴァシリイの子供の幼長序列は不明であり、ここに記載したのは仮のものである。



※なお、ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーは婚姻外で日本人女性前山光子との間に若子をもうけたが、若子はわかくしてなくなった。

4 死亡年月日

すでに述べたように、ネフスキーの生涯は悲劇的な形で突然幕がおりた。日本側スパイの嫌疑をかけられ、処刑されたのである。

長い間彼のことは歴史の闇に沈んでいたが、20年のちに名誉回復される。しかし、それ以後も依然として死因と死亡年月日は定まらなかった。

従来、1938年説 (1960年出版の『西夏文献学』[16]、岡崎精郎 [17] など) と1945年説 (1978年出版の『ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー』[2]、加藤九祚 [1] など) が有力であった。

今回の調査で東洋学研究所ペテルブルグ支部の古文書部でみせてもらった公式の死亡証明書には次のように書かれてあった。これは、彼が生前働いていた本務研究所であるペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋学研究所古文書部に保存されている。

死亡証明書

1—IO6 No.062734

ネフスキー

1945年2月14日死亡

53歳

心筋炎

1958年

死亡証明書にはどこで死亡したかは書かれていない。長い間1945年説は、当局の公式発表であるだけに、これが通説となっていた。

ソ連で最初にネフスキーの死の真相を伝えたのは、『アジア・アフリカの諸民族』1990年第5号所収の「弾圧された東洋学 20—50年代に弾圧を受けた東洋学者たち」であった。そこには次のように書かれてあった。

ネフスキー・ニコライ・アレクサンドロヴィチ (1892—1937)

日本学者、極東諸民族の言語文化の研究家、西夏文字の解読者。大学卒業後日本に出張。1929年帰国。東洋学研究所の研究員 (1930年より)、レニングラード東洋学院ならびにレニングラード大学の講師。刑法第58条1a項違反の嫌疑で1937年10月4日逮捕。ソ連内務人民委員会ならびにソ連検事委員会の1937年11月19日の決定により極刑を宣告される。1937年11月24日レニングラードで銃殺。1962年、死後、レーニン賞を受賞。⁽¹⁸⁾

一方、妻のイソに関しては次のように記してあった。

モンタニ=ネフスカヤ・イソコ (イソ) (1901— ?)

日本学者。1933年に日本から夫 (H.A. ネフスキー) のもとへ来る。レニングラードの東洋学院とレニングラード歴史・哲学・文学研究所で日本語会話を教える。1937年10月逮捕、非業の死をとげる。⁽¹⁹⁾

イソに関しては、死亡年は記されていない。ちなみに、彼女の苗字はモンタニではなく、萬谷である。名前は文献によりイソ、イソコ、磯子などが散見される。江原光太の調査によれば、戸籍では「萬谷イソ」になっているという。⁽²⁰⁾

2000年2月、インタビューでエレーナに苗字は何と読むのかたずねた。彼女は日本では「よろずや」であったが、ロシアでは「マンタニ=ネフスカヤ」で通していたという。当時としては珍しい日露の合成苗字である。米村正一によると、イソは「日本に永住し決してロシアへは帰らぬという約束でネフスキーと結婚した」という。⁽²¹⁾ ネフスキーの帰国がかなわぬ以上、覚悟を決めロシアに子供を抱えて乗り込んだイソは、日本との決別の気持ちをこめて、萬谷を「マンタニ」と読ませたのかも知れない。モンタニではない（念のため）。

1991年になり捜査書類が公開されるようになってはじめてエレーナ・ネフスカヤは、1938年でも1945年でもなく、1937年11月24日に両親が銃殺されたことを知ったのである。

1992年『ヴォストーク』5号はネフスキーの生誕10周年の特集をくみ、その中に遺児のエレーナ・ネフスカヤが書いた手記「両親について」を掲載した。

エレーナは「両親について」で死の真相について次のように書いている。

18歳になると私は両親の捜索をはじめようと決意した。たとえ逮捕されようとも、彼らの生死を確かめたかった。私はモスクワの KGB に出かけた。受け付けは週に3回で9時から19時までであった。私は朝の6時に着いた。長蛇の列だった。3000人が予約した人で、その他の人は予約なしだった。わたしは後者の組だった。これらの人々は37-38年に逮捕された人について何事かを知りたがっている人達であった。閉館の10分前に私の順番が回ってきた。受け付けにいたのは兵卒で、訪問者から請願書をうけとり、それを帳面に記載していた。

半年後 KGB に呼び出され、小さな窓越しに、父は1945年2月13日、母は同年の12月12日に死んだと告げられた。その後さらに2度質問書を提出したが、いつも答えは同じだった。両親の名誉回復後（1957-1958年）、私に正式の死亡証明書が送られてきた。父は1945年2月13日死亡、死因は心筋炎、母は1945年12月12日死亡、死因は腎症=腎炎となっていた。⁽²²⁾

この公式発表の月日がきわめていい加減なものであったことは、東洋学研究所に保存されている死亡証明書の死亡年月日と整合性をもたないことから明らかである。公式発表にも1945年2月13日説（エレーナに送付された死亡証明書）と1945年2月14日説（東洋学研究所保存の死亡証明書）があったことになる。

さらにエレーナはいう。

捜査書類が公開されるようになった1991年2月-3月になってはじめて、私は、父母が二人とも同じ日、1937年11月24日に銃殺されたことを知った。⁽²³⁾

エレーナ・ネフスカヤが公開した KGB の書類ではイソは「日本謀報機関のスパイ、ネフスキー H. A.（逮捕、自白）により1932年にレニングラードで日本側のスパイ活動にひき入

れられた」⁽²⁴⁾ ことになっている。

ちなみにネフスキーの妻子がロシアに到着したのは1933年のことである。弁護士として萬谷イソと娘エレーナのソ連渡航実現に奔走した米村正一によれば、ソ連に渡航したネフスキーから仕送りが全くないので、ソ連大使館のトロヤノフスキー大使がポケット・マネーで親子の生活を支えていたという。1933年後任のユレーネフ大使が赴任してからは、援助がなくなり、イソとネリはその日の暮らしにも困ったという。さらに米村は次のような後任大使の談話を紹介している。

夫婦の別居は個人の身勝手で、そのための仕送りなどは為替政策上できない相談である。大使個人としても磯子さんの生活費を出す気持ちはない。ソ連に行くように話をして下さい。⁽²⁵⁾

ウラジオストクまでの旅費は新任大使が出してくれたという。
イソの有罪判決に次のような一節が含まれている。

1932年、ネフスキーにより日本の諜報機関に引き入れられる。彼女自身は彼の命令で日本人モリとイワン・フヴァンを組織に引き入れ、日本の女スパイ、アベと連絡をとっていた。⁽²⁶⁾

すでに述べたように、妻の萬谷イソと娘のネリがネフスキーのもとに行くべく日本を出発したのは1933年である。外務省関係の書類を照合すれば、このことは容易に証明できたはずである。1932年に夫がいるソ連に行くべく奔走していたイソがソ連で日本側スパイとして働いていたと判決文に書いてあるのである。

しかも、有罪判決は1938年1月に作製されている。日は示されていない。ネフスキー夫妻が銃殺されたのは1937年11月24日なので、有罪判決は殺害してからおりたことになる。今回の調査でいま一つ彼の死にまつわる未公開のおぞましい資料を彼が囑託として働いていたエルミタージュで発見した。調査にご協力いただいた故ウスペンスキー未亡人のタマラさんに感謝したい。

そこには次のようなことが書いてあった。

日 付	職 名	職 場	理 由
34年11月1日	教授	東方部	決定107
1935年	教授を正会員にする	東方部	決定44－ 4月25日
35年12月21日	学位授与資格委員会のメンバー	東方部	決定111－ 35年12月21日
37年12月10日	解雇	東方部	決定96 12月31日

最後の欄に注目したい。ネフスキーは1937年12月10日に解雇されている。しかもその解雇決定は12月31日におきているのである。普通は解雇が決定され、それが執行されるのだが、ここでは順序が逆になっている。しかも、ネフスキーは37年11月24日に処刑されているので、彼らは死人を解雇処分にしたことになる。スターリン時代の愚劣さを日付の数字が雄弁に物語っている。

ネフスキーの罪状は次のようなものであった。

- 1 東洋で働くスタッフを養成する学術機関に浸透、これらの機関の指導者たちに接近し、反革命の目的で利用出来そうな人物をマークする。
- 2 日本に勤務すべく養成されている人達の同様な（政治的性格の）データ、交友関係、素行を日本の諜報機関に示し、通報する。
- 3 赤軍の状態、とくに空軍、国防企業の生産活動についてのスパイ資料を日本の諜報機関のために収集する。⁽²⁷⁾

さらにネフスキーは次のように自白させられている。

アベ⁽²⁸⁾と連絡をとるために、1923年、私は特命を帯びてモスクワに到着した。プレトネル宅にたち寄ると、彼女はアベに電話をかけて、自宅に呼び寄せ、私たちにひきあわせた。⁽²⁹⁾

ここでいうプレトネルとはオレグ・プレトネル（大阪外国語大学、天理大学、神戸市外国語大学などのロシア語教師であったオレストの弟）の未亡人である。ちなみにネフスキーは1915年来日し、1929年に帰国するまで一度もロシアやソ連に足を踏み入れたことはなかった。

日本にいるネフスキーがモスクワでスパイ行為をしていたというのである。かくも根拠のない冤罪で、あれほどの大学者がむざむざ銃殺されたのである。

内務省の人民委員部の元所員のガルカヴェンコとスレプネフ自身が1957年の尋問の中で、ネフスキーには彼のスパイ行為や他の反革命的な活動を示すいかなる証拠もなかったと告白していた。さらにネフスキーを直立不動の姿勢で立たせた上で、間断なく尋問をくりかえしたことを認めている。さらに、彼らの上司のゴルプは「自白を強要するために」逮捕者を半殺しの目にあわせたことを認めている⁽³⁰⁾。

5 死亡場所

死の場所についても諸説があった。45年死亡説を信じた多くの人はシベリアのどこかの収容所で命を落としたと思いきこんでいた。

たとえば、加藤九祚は次のように書いている。

逮捕されてから七年あまりの歳月がたっているが、その間シベリアのどこかの収容所にいたのであろう。本より重いものを持ったことのない瘦身のネフスキーができたことは、せいぜい風呂たきか便所掃除くらいのものだったと思われる。(31)

真相をあきらかにしたのはエレナ・ネフスカヤである。1996年、エレナ・ネフスカヤの手記「両親について」の増補・改訂版が『ペテルブルグの東洋学 第8巻』に採録された。そこには1937年11月24日について次のような記述が追加されている。

KGBの地下室の下水管からネヴァ河に血が大量に流出し、小船で血を散らしたという。(32)

これ以上のことは書かれていないが、ネフスキーがシベリアではなくレニングラードで銃殺された可能性が唆されている。エレナ・ネフスカヤに尋ねると、レニングラードで殺されたと思うと答えてくれた。遺体はどうしたのか。

1998年にサンクト・ペテルブルグで『レニングラードの殉教者列伝 1937—1938年 第3巻』(33)がでた。1937年11月に殺害された人達の名簿と略歴を記したものである。これは1990年1月10日から『夕刊レニングラード』(『夕刊ペテルブルグ』)に連載された粛清された人たちのリストを改訂増補したものである。そこにはネフスキー夫妻の略歴も記されていて、エレナ・ネフスカヤが簡単な伝記を書いている。

テロルの犠牲となった数千の遺体は合同墓地に埋葬された。それらの墓地のうちもっとも巨大な墓地のひとつにペテルブルグ郊外のレヴァショフスカヤ・プスタシがある。エレナ・ネフスカヤはそこにネフスキー夫妻が葬られられている可能性が高いという。

加藤九祚のエレナ・ネフスカヤ訪問記(34)を読んでいた私は、どうしてもネフスキーが葬られた可能性が高いレヴァショフスカヤ・プスタシを見ておきたかった。ペテルブルグから30キロのところにあるという。一人で出かけるつもりでエレナ・ネフスカヤに最寄りのバス停と道順を教えてもらった。

時差の関係か朝4時頃に目がさめたが、土曜日なのであまり早くおきてもしかたがないので、9時にレストランで朝食をとり、ホテルの部屋にもどると電話のベルがなった。受話器をとると、エレナ・ネフスカヤさんだった。娘婿のミーシャが以前からの約束を断って、車で案内してくれるという。昼間なので一人で大丈夫だからと、断ったがすでに約束はキャンセルしたからと説得されて、一時間後にロビーで待ちあわせることになった。

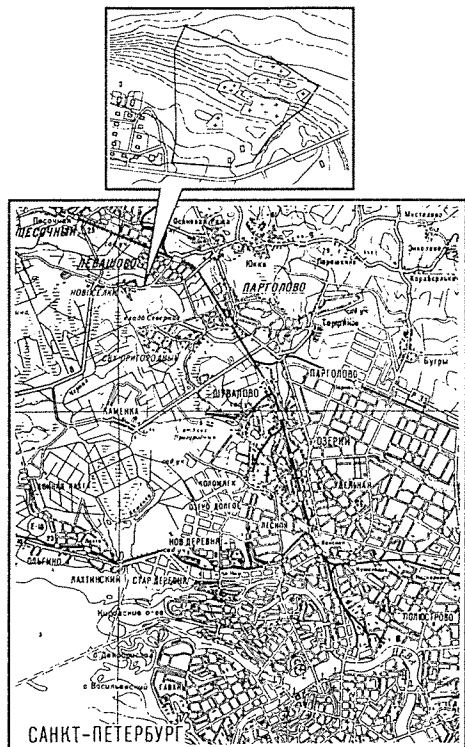
10時45分、時間通りにミーシャが迎えにきてくれた。彼の車でペテルブルグを北上する。監獄の側をとおり、ネフスキーが抑留されていたKGBの建物(通称ポリショイ・ドーム)を左手にのぞみながらレヴァショーヴォにむかった。緑の板塀がみえてきた。広さ9ヘクタールにおよぶといわれる内務省人民委員部の集団墓地である。レヴァショフスカヤ・プスタシは1989年までは歴史の闇にしずんでいた場所であった。

緑の板塀の門の前にはギロチンにかけられた人の彫像が見える。そこにはГОСТ(全ソ国

家規格)と書いてあるのが、目につく。中にはいると、管理事務所があったが、そこへは寄らず、集団墓地にむかう。大きな墓穴をほってそこにうめたので、だれがどこにうめられているのかわからない。それでも肉親がお墓を建てたのだろうか、十字架が散見される。ロシア正教会の慰霊碑、ポーランドの慰霊碑、ペルーシ・リトワニアの慰霊碑、インゲルマンランド・フィンランドの慰霊碑、ユダヤの慰霊碑、ドイツの慰霊碑などが目につく。写真や花も飾ってあった。思わずカメラのシャッターをおろしていると、管理人が現れ、入場許可をとっているのかと詰問された。ここが秘密の遺体処理場であったことは周知の事実で今更何を問題にするのかと思ったが、ここには同郷の日本人も葬られているから、お参りにきたのだといった。すると、了解したのか、それ以上は何も言わなかった。

管理棟の博物室に入り、そこでレヴァシヨフスカヤ・プスタシは1937年から1954年までの間に銃殺された人達の秘密の墓場として用いられていたこと、ここには46771人の人が葬られていることを知った。そのうち政治的な犠牲者は40485人だという。そのうち、ネフスキーのように1937年に銃殺されたのは、18719人だという。さらに、ネフスキーが銃殺された11月24日だけで、695人の人が殺されたという。

ちなみに『レニングラード殉教者列伝 1937—1938年』の表と裏の扉を飾っている写真はレヴァシヨフスカヤ・プスタシの緑の板塀である。



Место расположения
Левашовского мемориального кладбища
レヴァシヨフスコエ記念墓地の所在地



エレーナ・ネフスカヤ
2000年2月29日 筆者撮影



ギロチンを型どった記念碑
筆者撮影



ロシア正教徒の慰霊碑
筆者撮影

6 終わりに

ネフスキーの事件はスターリンの粛清という氷山の一角である。家と職場以外ほとんどどこにも行ったことのないネフスキーが日本人に「バルチック艦隊の戦闘能力についてスパイの材料を提供」したとでっちあげられた。

冤罪でネフスキーは殺されたが、彼の遺産の多くは本務研究所であったレニングラードの東洋学研究所に移され、現在も保管されている。

60年代になってネフスキーの学術遺産の検討が始まった。彼は多くのものを公刊せずに逝ってしまった。ロシアでは3. И. ゴルバチョワの尽力で『西夏文献学』2巻が1960年に出版され、1962年にはそれに対しレーニン賞が贈られている。これは、それ以後ネフスキーの遺稿が出版される契機となった。西夏学者としてのネフスキーを活写したE. И. クイチャーノフの『文字のみが語る』⁽³⁵⁾が1965年に出た。日本でも岡正雄がネフスキーの論文や手紙をまとめ、『月と不死』(1971年、平凡社)として公刊した。1972年にはJ. И. グロムコフスカヤがネフスキーの遺稿を『アイヌのフォークロア』⁽³⁶⁾として出版した。1978年には『宮古島のフォークロア』⁽³⁷⁾、1981年には『曹語の方言資料 北部曹語方言辞書』⁽³⁸⁾が死後出版された。

彼の生誕100周年を記念して『永遠のガラスの上に……ニコライ・ネフスキー、翻訳、研究、伝記資料』が単行本の形でモスクワから出版されるはずであった。責任編集者であったグロムコフスカヤが1994年12月に病死したことから、単行本ではなく『ペテルブルグの東洋学 第8巻』の中に「ネフスキー特集」として組み入れられ、1996年にペテルブルグで出版された。

表題はネフスキーが愛した詩人O. E. マンデルシタムの詩『石』からの一節で、ネフスキーの生の痕跡が永遠のガラスの上にはきかけた息やそのぬくもりが今も残っていることを暗示している。

関係者の話では十分な校正がおこなわれなかったらしい。ネフスキーの日本語論文の翻訳者の氏名も実際に翻訳をおこなった人のものとはなっていないという(たとえば、「オシラ様信仰に関する様々の人宛の手紙」はA. M. カバノフが露訳を担当したが、A. H. メシチェリャコフの名前になっている)。また、Лечение болезни (病気の治療) はもともとロシア語で書かれたテキストであるが、日本語から翻訳したかのような注がふされている。

とはいえ、不備を考慮にいれてもネフスキーの労作を世に出したことは、いくら評価してもしすぎることはない。日本からも多くの研究者が出版資金を援助したという。

しかし、この本もネフスキーが科学においてなした貢献を全面的にカバーするものではない。多くの遺稿が出版を待っている。

ネフスキーは自分の調査に没頭し、後継者を養成するひまがなかった。ロシア科学アカデミー東洋学研究所副所長のB. M. アルバートフによれば、1929—37年代に石浜純太郎に宛てたネフスキーの手紙は草書体なので今では誰も読めないという。⁽³⁹⁾

今回はふれることができなかったが、東洋学研究所に残るネフスキーの遺稿は日本、アイヌ、宮古島、琉球、八重山、台湾の曹族、西夏、中国、チベットなどをカバーするものであ

る。まさに一人で十人分の仕事をした巨人といえよう。ネフスキーのようなきわめて多面的な学者を一人でとらえることは難しい。共同研究の必要性を痛感している。

附記

今回の調査旅行は、大阪外国語大学の教育改善費によるものであり、ペテルブルグ出張の機会を与えてくださった赤木攻学長はじめ関係者の方々に御礼を申しあげる。また、ロシアでの調査に便宜をはかって下さったネフスキーの遺児エレナ・ネフスカヤさん、エルミタージュのタマーラ・ウスペンスカヤさん、ペテルブルグ大学のレイビン先生、東洋学研究所のクイチヤーノフ先生(所長)、ゴレグリヤド先生、同古文書部のプチンツェヴァさんに心から御礼申しあげる。

- (1) 加藤九祚『天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社 1976年。
- (2) Л.Л.Громковская, Е.И.Кычанов. Николай Александрович Невский. М., 1978.
- (3) Там же. С.8.
- (4) Там же. С. 9.
- (5) Государственный архив ярославской области (далее-ГАЯО). ф. 230, оп. 10, д. 72.
- (6) ГАЯО. ф. 230, оп. 11, д. 330, л. 233об.
- (7) ГАЯО. ф. 419, оп. 1, д. 101, л. 82-83.
- (8) ГАЯО. ф. 230, оп. 11, д. 330, л. 168об.
- (9) ГАЯО. ф. 230, оп. 11, д. 330, л. 165об-166.
- (10) ГАЯО. ф. 230, оп. 11, д. 330, л. 94об-95.
- (11) ГАЯО. ф. 642, оп. 3, д. 1326.
- (12) ГАЯО. Л.Л.Громковская, Е.И.Кычанов. Указ. кн. С. 12.
- (13) ГАЯО. ф. 230, оп. 2, д. 4119.
- (14) ГАЯО. ф. 642, оп. 3, д. 1016.
- (15) ГАЯО. ф. 230, оп. 2, д. 4666.
- (16) Н. А. Невский. Тангутская филология. Исследования и словарь в двух книгах. Кн. 1.1960.

- (17) 岡崎精郎「ニコライ・A・ネフスキー氏の業績と生涯」『懐徳』33号、懐徳堂堂友会 1962年 61頁。
- (18) Народы Азии и Африки. 1990. №5. С. 98
- (19) Там же. С. 8.
- (20) 江原光太「ネフスキー夫妻の悲劇—磯子・ネフスカヤの幻影を追って—」『えうる』1975年 創刊号 北海道大学文学部ロシア文学研究室 54頁。
- (21) 米村正一「ニコライ・ネフスキー夫妻の手紙」『図書』1967年12号 岩波書店 20頁。
- (22) E. H. Невская. О родителях. //Восток. 1992. №5. С. 93.
- (23) Там же.
- (24) Петербургское востоковедение. Вып. 8. С. 537.
- (25) 米村正一、前掲論文。
- (26) Восток. С. 94.
- (27) Там же.
- (28) アベについては次の論文を参照されたい。松山真一「ネフスキーと『日本諜報機関のスパイ』アベ」『月刊百科8』1995年 平凡社。
- (29) Восток. С. 94.
- (30) Там же. С. 96.
- (31) 加藤久祚『天の蛇』河出書房新社 1976年 288頁。
- (32) E. H. Невская. О родителях. //Петербургское востоковедение. Вып. 8. Санкт-Петербург. 1966. С. 539.
- (33) Ленинградский мартиролог 1937-1938. Т. 3. Санкт-Петербург. 1998.
- (34) ちなみに、加藤の論文ではレワシヨフスキー・プスティシュとミスプリされているが、正しくはレワシヨフスカヤ・プスタシ。加藤久祚「エレナ・ネフスカヤ著『両親について』をめぐる」『創価大学人文論集』1998年10号 282頁。
- (35) E. И. Кычанов. Звучат лишь письма. М., 1965.
- (36) Н. А. Невский. Айнский фольклор. М., 1972.
- (37) Н. А. Невский. Фольклор островов Мьяко. М., 1978.
- (38) Н. А. Невский. Материалы по говорам языка цоу. Словарь диалекта северных цоу. М., 1981.

- (39) В.М.Алпатов. Николай Александрович Невский. // Вестник Московского университета. Серия литературы и языка. Т. 52. №8. 1993. С.81.

(2000.4.14受理)